

# 班固における処世と著作

南部 英彦

Bang-Gu (班固) 's Views on the Conduct of Life and Writing

NAMBU Hidehiko

(Received September 24, 2021)

## はじめに

本稿は、後漢・班固(三二〇―九二)における処世と著作への見方を検討する。かつて岡村繁氏は「班固と張衡―その創作態度の異質性<sup>1)</sup>」という論文で、後漢初期と中期に相前後して登場した文豪の班固と張衡とを対比して、両者の間には、「両都賦」と「二京賦」、「幽通賦」と「思玄賦」、「答賓戲」「応譏」と「応問」、「漢書」と「漢記」という題材が類似した著作があった一方で、両者の創作態度には漢室中心の絶対主義への迎合の態度と腐敗墮落した後漢王朝の現実への批判的態度という相違があったとした。しかし岡村氏は、班固のこうした創作態度の根底には彼の「離騷序」に強調する「明哲保身」の処世観<sup>2)</sup>があったとしつつも、その具体的内容を明らかにしていない。班固における処世と著作への見方の再検討を試みる所以である。この問題を考察するに際しては、「離騷序」及び「漢書」司馬遷伝・贊において屈原と司馬遷の処世に対して『詩』大雅・烝民の「既に明且つ哲にして、以て其の身を保つ」(既明且哲、以保其身)という二句を用いて論評が行われるとともに、「離騷」・『史記』という著作に対しても論評が行われていることが一つの手がかりとなると思われる。また私見によると、班固の「幽通賦」は、運命とは何かを提示し、これを抛り所として在るべき処世の在り方と自己の著作の意義を述べた著作である。

そこで本稿では、まず「離騷序」及び「漢書」司馬遷伝・贊における屈原・司馬遷に対する『詩経』大雅・烝民の二句を用いた処世への論評と「離騷」・『史記』という著作への論評の両者の内容を確認し、班固における処世と著作との関係を捉える。ついで班固の「幽通賦」が述べる、運命観と処世観との結びつき、班氏一族の処世の在り方、それらをふまえて班固が選り取った生き方を捉える。これらの作業により、班固の創作態度の根柢にあった意識がどのようなものであったかを明らかにしたい。

## 一、班固による屈原・司馬遷の処世及び「離騷」・『史記』への論評

本節では、「離騷序」及び「漢書」司馬遷伝の贊における、『詩』大雅・烝民の「既明且哲、能保其身」という二句を用いた屈原・司馬遷の処世への論評と「離騷」・『史記』という著作への論評の内容を併せて把握したのち、班固における処世と著作との関係を捉える。

### (1) 「離騷序」

班固の「離騷序」は、『楚辞章句』天問篇の王逸の後叙のあとに附載されている。以下、「離騷序」の記述の流れに沿ってその内容を捉えていく。班固は、まず「昔在<sup>ひかし</sup>孝武は、博く古文を観る」(昔在孝武、博覽古文)として淮南王劉安「離騷伝」の「国風は色を好めども淫ならず、小雅は怨悱すれども乱れず。離騷の若<sup>ごと</sup>き者は之を兼ねと謂ふべし。濁穢の中を蟬蛻し、塵埃の外に浮

遊し、皜然として泥めども滓まらず。此の志を推せば、日月と光を争ふと雖も可なり」(国風好色而不淫、小雅怨悱而不乱。若離騷者、可謂兼之矣。蟬蛻濁穢之中、浮游塵埃之外、皜然泥而不滓。推此志、雖与日月争光可也)云々との「離騷」評価を取り上げ、それを「斯の論、其の真を過つに似たり」(斯論似過其真)として否定したうえで、「故に經書・伝記の本文を博く採りて、以て之が解を為らん」(故博採經書伝記本文、以為之解)と述べて、自己の認める在るべき処世の在り方を、儒家の經書と伝記(六藝の解釈)をもとに提示するすなわち、「(ア)君子の道の窮まるは命なり。故に(イ)潜龍是とせられざるも悶ふること無く、(ウ)閑睢は周道を哀しめども傷まず。(エ)蘧瑗は懐くべきの智を持し、(オ)甯武は愚の如きの性を保ちて、咸以て命を全くし害を避け、世の患を受けず」(君子道窮、命矣。故潜龍不見是而無悶、閑睢哀周道而不傷、蘧瑗持可懷之智、甯武保如愚之性、咸以全命避害、不受世患)と述べる。(ア)〜(オ)の箇所の典故は、それぞれ(ア)『春秋繁露』随本消息篇、(イ)『易』乾卦・文言伝、(ウ)『論語』八佾篇、(エ)『論語』衛靈公篇、(オ)『論語』公冶長篇である。ここで班固は、經書の「伝」つまり『春秋繁露』や易伝といった經書の解釈や『論語』の孔子の言葉を根拠として、君子が困窮するのは運命であるがゆえに、困窮した際には、『易』の「潜龍」のように煩悶せず、『詩』の閑睢のように国の衰えに対する哀しみによって心を傷めず、蘧瑗や甯武子のように、道無き世においては愚人のふりをするなどして害を避けて身を保つことを在るべき処世法として提示するのである。そのうえで「故に大雅に曰く、既に明且つ哲にして、以て其の身を保つと。斯れ、貴しと為す」(故大雅曰、既明且哲、以保其身。斯為貴矣)と述べるので、この処世法は『詩』大雅・烝民という經書の二句に対する「伝記」にもとづく班固の解釈と見なせる。そこで班固は「離騷序」における『詩』大雅・烝民の二句の「明哲保身」を、時勢を見極めた出処進退による自己保全と捉えていたと考えられる。

ついで班固は「今屈原の若きは、才を露して己を揚げ、危国群小の間に競いて、以て讒賊に離ふ。然して懷王を責数し、椒・蘭を怨悪して、神を愁へしめて思を苦しめ、強ひて其の人を非り、容れられざるを忿懣して、江に沈みて死す」(今若屈原、露才揚己、競乎危国群小之間、以離讒賊。然責数懷王、怨悪椒蘭、愁神苦思、強非其人、忿懣不容、沈江而死)云々と述べる。班固は、屈原が自己の才能を周囲に誇示して讒言を受け、その結果、精神を苦しめて自死した点を「詩」大雅・烝民のいう「明哲保身」に合致しないと否定的に見る。

そして、この「経伝」にもとづく屈原の処世への批判的な見方を基礎にして、「離騷」が「清黎・狂狷・景行の士」を貶めたり、「崑崙・帝閭・宓妃」などの荒唐無稽な語を用いたりする点を「皆法度の政、經義の載する所に非ず(皆非法度之政、經義所載)」と述べ、「之を詩の風雅を兼ねて、日月と光を争ふと謂うは、過てり(謂之兼詩風雅而与日月争光、過矣)」として、淮南王劉安「離騷伝」の「詩」の風雅に合致するという「離騷」評価を否定するのである。しかしその一方で「然れども其の文は弘博麗雅にして、辞賦の宗と為る。後世其の英華を斟酌して、其の従容に則り象らざるは莫し。宋玉・唐勒・景差の徒自り、漢興りて、枚乗・司馬相如・劉向・楊雄に至るまで、文辞を騁極し、好みて之を悲しむ。自ら及ぶ能はずと謂へばなり。明智の器に非ずと雖も、妙才と謂ふべき者なり(然其文弘博麗雅、為辞賦宗。後世莫不斟酌其英華而則象其従容。自宋玉・唐勒・景差之徒、漢興、枚乗・司馬相如・劉向・楊雄、騁極文辞、好而悲之。自謂不能及也。雖非明智之器、可謂妙才者也)と述べる。班固は、劉安の「離騷」評価は否定するが、「離騷」が戦国の宋玉・唐勒・景差、前漢の枚乗・司馬相如・劉向・楊雄にとつての辞賦の宗匠となつた点を良しとして、屈原を明智の器ではないが妙才をもつ者と評価する。この屈原及び「離騷」に対する班固の論評の態度は、矢田尚子氏が「屈原の生き方や制作態度に対しては完全に否定的であるが、「離騷」の修辞が後世の文学に多大な影響を与えたことについては肯定的にとらえている」と述べる通りである。

## (2) 『漢書』司馬遷伝・贊

次に、『漢書』司馬遷伝の贊の内容を見ていく。班固はこの贊で、司馬遷の「史記」という著作と司馬遷の処世の在り方の両者について論評を行っている。班固はまず「古書契の作りて自りして史官有り。其の載籍は博し。孔氏之を纂ぶに至りて、上は唐堯に断じ、下は秦繆に訖る。唐虞以前は、遺文有りと雖も、其の語は経ならず。故に黄帝・顓頊の事を言ふは未だ明らかにすべからざるなり(自古書契之作而有史官、其載籍博矣。至孔氏纂之、上断唐堯、下訖秦繆。唐虞以前、雖有遺文、其語不經、故言黄帝・顓頊之事未可明也)という。古代以来の史官が記録した書物の中から、孔子は堯から秦穆公までを範囲として「書」を編纂した。黄帝・顓頊など堯舜以前の帝王の歴史に関する遺文は「経」に記載されたものではないので、その真偽は明確ではないとする。ついで「孔子魯の史記に因りて春秋を作るに及び、而して左丘明其の本事を論輯して以て之が伝を為り、又異同を纂びて国語を為る。又世本有りて、黄帝以来春秋時に至るまでの帝王・公侯・卿大夫の祖世の出づる所を録す。春秋の後、

七国並びに争ふ、秦諸侯を兼ねて、戦国策有り。漢興り秦を伐ちて天下を定めて、楚漢春秋有り。司馬遷 左氏・国語に拠り、世本・戦国策を採り、楚漢春秋を述べ、其の後事を接ぎ、天漢に訖る。其の秦漢を言ふは詳し（及孔子因魯史記而作春秋、而左丘明論輯其本事以為之伝、又箕異同为国語。又有世本、録黄帝以来至春秋時帝王公侯卿大夫祖世所出。春秋之後、七国並争、秦兼諸侯、有戦国策。漢興伐秦定天下、有楚漢春秋。司馬遷拠左氏・国語、采世本・戦国策、述楚漢春秋、接其後事、訖于天漢。其言秦漢、詳矣」と述べる。すなわち、司馬遷は、左丘明が『春秋』の記事の淵源の事実を集めて作った『左氏伝』、『左氏伝』と異同のある資料を選び定めた『国語』、黄帝以来『春秋』に記録された時代に至るまでの帝王・公侯・卿大夫の祖先の来歴を記す『世本』、『春秋』以後の七国が覇を争い、秦が諸侯を兼併するに至る経緯を記す『戦国策』、漢が秦を討伐して天下を平定する経緯を記す『楚漢春秋』に依拠し、また漢の興起以後の史実を加えて、武帝から武帝の天漢年間までの歴史を記した『史記』は、特に秦漢時代の史実に詳細であると班固はいう。班固はさらに「経を採り伝を摭ひ、数家の事を分散するは、甚だ疏略多く、或いは抵牾すること有り。亦た其の涉獵する者は広博にして、経伝を貫穿し、古今上下数千載の間に馳騁するは、斯れ以て勤む（至於采経摭伝、分散数家之事、甚多疏略、或有抵牾。亦其涉獵者広博、貫穿経伝、馳騁古今、上下数千載間。斯以勤矣）」と述べる。「経伝」の文を採録しつつ同時に諸家の著書を各所で用いる手法は疏略で差し障りがあるとしながらも、やはり武帝から漢武帝までの数千年の歴史叙述の中に『書』『春秋』『左氏伝』『国語』などの「経伝」の記述を貫通させた点を評価する。

しかしその一方で「又た其の是非は頗る聖人に繆る。大道を論じては則ち黄老を先にして六経を後にし、游侠を序べては則ち処士を退けて姦雄を進め、貨殖を述べては則ち勢利を崇びて賤貧を羞とす、此れ其の蔽う所なり（又其是非頗繆於聖人、論大道則先黄老而後六経、序游侠則退処士而進姦雄、述貨殖則崇勢利而羞賤貧、此其所蔽也）」として、大道を論じるに当たり、黄老思想を六経（六藝）の学術よりも重んじる態度を欠点として挙げながら、同時に「然れども劉向・揚雄の博く群書を極むる自り、皆遷は良史の材有り、其の善に服ひて事理を序べ、辨にして華ならず、質にして俚ならず、其の文は直、其の事は核にして、虚しく美ならず、悪を隠さずと称へ、故に之を実録と謂ふ（然自劉向・揚雄博極群書、皆称遷有良史之材、服其善序事理、辨而不華、質而不俚、其文直、其事核、不虚美、不隱惡、故謂之実録）」と述べる。ここまでの贊の

記述は、班彪『後伝』の「略論」（『後漢書』班彪列伝所収）の『史記』評価をほぼ受け継いでいる。しかし、以下の司馬遷の処世を論じる箇所は班固の独創である。すなわち「烏呼、遷の博物洽聞なるを以て自ら全くする能わず、既に極刑に陥り、幽くして発憤するは、書亦信なり。其の自ら傷悼する所以を述ぶるに、小雅巷伯の倫なり。夫れ唯大雅の既に明且つ哲にして、能く其の身を保つは、難きかな（烏呼、以遷之博物洽聞、而不能以知自全、既陷極刑、幽而發憤、書亦信矣。迹其所以自傷悼、小雅巷伯之倫。夫唯大雅、既明且哲、能保其身、難矣哉）」として、極刑に陥り、『詩』小雅・巷伯のように自らを嘆いたとして、司馬遷は幅広い知識をもちながら「明哲保身」を実践できなかったとして、その処世を否定的に評価する。ここでも班固は、『詩』大雅・烝民の「明哲保身」を時勢を見極めた出処進退による自己保全と捉えている。

班固は、司馬遷の『史記』という著作に関しては、屈原の「離騷」に対して行ったと同様に、六藝の「経伝」に合致するか否かを評価の基準として用い、『史記』に「経伝」の条理が貫く点を長所と見つつ、黄老を六藝より重んじることを短所と見、かつ劉向・揚雄等によるそれら著作に対する「良史の材有り」との肯定的評価を取り上げる。これは班彪『後伝』「略論」の『史記』評価を受け継いだもので、全体としては『史記』という著作を肯定的に評価したものと判断できる。しかし一方で、司馬遷の処世に関しては、「明哲保身」を実践できなかったと否定的に述べているのである。

### （3）班固における処世と著作

これまで「離騷序」と『漢書』司馬遷伝における『詩』大雅・烝民の二句の用例から、班固が「明哲保身」を時勢を見極めた出処進退による自己保全との意味で理解していることを確認した。班固は屈原及び司馬遷について、「明哲保身」を実践できなかった点を否定的に述べながら、他方で彼らの著作に対する後世の称賛を取り上げていた。それでは、班固において処世と著作とはいかなる関係にあったのだろうか。この点を考察するに当たってはまず、八木章好氏の「『明哲保身』考―中国の文人精神の表象として」という論文を参考にした。八木氏は「明哲保身」は『詩』大雅・烝民の「肅肅王命、仲山甫將之。邦国若否、仲山甫明之。既明且哲、以保其身。夙夜匪解、以事一人」という詩句に由来するとして、この詩は、樊侯の仲山甫が周の宣王を輔佐し、王命を正しく執り行い、諸侯の国々によく対処したことを尹吉甫が讃えたもので、篇中の二句「既明且哲、以保其身」は仲山甫が「明」（物事の判断に明るいこと）である上に、かつ「哲」（知恵が優れていること）であり、それゆえに自らの身

を無事安泰に保ったことを褒め称えるものであり、これを四文字に縮めたものが「明哲保身」であるという。八木氏はまた「既明且哲、以保其身」は、君子の心得として『礼記』中庸篇の文中に引用されたことにより、後世、儒家の説く処世の法として博く知られるようになったという。そこで中庸篇を見ると、「国に道有れば、其の言以て興すに足る。国に道無ければ、其の黙以て容むに足る。詩に、既に明にして且つ哲なり。以て其の身を保つと曰ふは、其れ此れを之れ謂ふか（国有道、其言足以興、国無道、其默足以容。詩曰、既明且哲、以保其身、其此之謂与）」とあり、国に道が行われていれば、言説によって統治を補助し、国に道が行われていなければ、沈黙を守って自己の身を保全するという。中庸篇は時勢を見極めて言説と沈黙とを柔軟に使い分ける処世を是とするのである。中庸篇の「国有道、其言足以興。国無道、其默足以容」という処世法と、これと類似する『孟子』尽心上篇の「窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす（窮則独善其身、達則兼善天下）」という処世法とを対照すると、中庸篇にいう国に道が行われているか否かという場合分けは、『孟子』にいう個人が栄達するか困窮するかという場合分けに対応し、中庸篇にいう言・黙という進退の切り替えは、『孟子』にいう救世・独善という進退の切り替えに対応する。ただし、班固の「離騷序」の『詩』大雅・烝民の「明哲保身」の用法は、中庸篇・『孟子』尽心上篇の処世法と比較すると、国家に道が行われず、個人が困窮した場合にのみ視点を定めて「君子道窮、命矣」として処世論を述べるところに特徴がある。そして班固は、屈原・司馬遷は時勢を見極めて自己保全を果たすことはできなかったが、彼らが困窮の末に著した「離騷」・『史記』という言説・著作が、のちに六藝に通曉した劉向・楊雄等にとつての辞賦制作・史書制作の助けとなった点を肯定的に評価する態度を併せもつのである。「離騷序」における屈原に対する「雖非明智之器、可謂妙才者也」との評言から、処世における著作の意義をとりわけ重視する班固の態度を窺えるのである。

## 二、「幽通賦」―運命観と処世観

班固は「離騷序」で「君子道窮、命矣」との認識にもとづいて、在るべき処世の在り方を述べていた。班固の「明哲保身」の処世観は、運命観を根柢に据えたと捉えられる。そこで班固が自己の運命観・処世観を主題として述べる著作として取り上げたいのが、『漢書』叙伝上に「子有りて固と曰ふ。弱冠にし

て孤なり。幽通の賦を作りて、以て命を致め志を遂げんとす（有子曰固、弱冠而孤、作幽通之賦、以致命遂志）」と記される「幽通賦」である。この文の「致命遂志」という語句が『易』困卦・大象の「象曰、沢无水、困。君子以致命遂志」という文にもとづくこと、また顔師古が引く劉徳の注に「致は極なり。吉凶性命を陳べて、己の意を明らかにするを遂ぐ（致、極也。陳吉凶性命、遂明己之意）」とあることを参考にすると、班固が「幽通賦」を著した目的は、父を亡くして困窮した状況に在って、運命とは何かを見極めることで自己の本志を遂げることであった。そこで、本節及び次節では、「幽通賦」（『漢書』叙伝上所収）が述べる、班固における運命観と処世観との関係の仕方、班固一族の処世の在り方を考察し、そのうえで彼が選り取った生き方とは何かを明らかにしたい。

まずは、「幽通賦」における運命と処世との関係について着目する。「幽通賦」には「道は混成して自然なり。術は原を同じくして流れを分かたず（道混成而自然兮、術同原而分流）」という文がある。道という根元は渾沌として成り、自然なる働きを持っているが、道にもとづく学術は種々の流派に分岐してしまふというのである。こう述べたのち、班固は、「（A）神は心に先んじて命を定め、（B）命は行ひに随ひて消息す。（C）幹流して遷りて其れ済はず、故に遭罹して羸縮す（神先心以定命兮、命隨行以消息。幹流遷其不済兮、故遭罹而羸縮）」という。ここに示された（A）（B）（C）の文は、後漢初期に流行した所謂の三命説との対応関係を認めることができる。三命説は、本来緯書の説であったとされる。

命に三科有り。受命以て慶を保つもの有り。遭命以て暴に謫ふもの有り。随命以て行ひを督るもの有り。受命とは年寿を謂ふなり。遭命とは行ひの善なるも凶に遭ふを謂ふなり。随命とは其の善悪に随ひて之に報いるを謂う（命有三科。有受命以保慶。有遭命以謫暴。有随命以督行。受命謂年寿也。遭命謂行善而遇凶也。随命謂隨其善惡而報之）。（『礼記』祭法正義所引「孝經援神契」）

命とは天の命なり。帝より受くる所は、行ひ正しくして寿命を得るに過ぎず。寿命とは正命なり。九九八十一より起こる。随命有り。随命とは行ひに随ひて命と為るなり。遭命有り。遭命とは行ひ正しくして誤らざるも、世残賊にして、君上逆乱し、辜咎下に流れ、災譴並びに奔り、陰陽散忤し、暴氣・雷至り、日を滅し地を動かし、人命を天絶するに逢ふ。紗鹿邑を襲ふ、是れなり（命者天之命也。所受於帝、行正不過得寿命。寿

命、正命也。起九九八十一。有随命。随命者随行為命也。有遭命。遭命者行正不誤、逢世殘賊、君上逆亂、辜咎下流、災譴並發、陰陽散忤、暴氣雷至、滅日動地、天絕人命。紗鹿襲邑是也。〔「太平御覽」人事部一・叙人所引「春秋元命苞」〕

右の二つの緯書（「孝經援神契」「春秋元命苞」）の説くところによると、緯書の三命説とは「受命（寿命）」つまり天与の寿命をいい、「随命」とは行いの善し悪しに応じて報いを受けることをいい、「遭命」とは行いが善いにもかかわらず災禍を蒙ることをいう。この三種の命の存在を説明する三命説の内容を鑑みると、三命説の「受命」「随命」「遭命」はそれぞれ前引の「幽通賦」の（A）（B）（C）に対応する。そして「幽通賦」ではこの三命説を結び合わせて、天神は人心に先んじて命を定めるが、その命は人の行いの善し悪しに従って変化するとともに、自身の行いを原因としない禍福に遭遇して人生が盛衰することがあるとして、三命の複合体として人生の成り行きを理解すると考えられるのである。

さて、この「幽通賦」の（A）（B）（C）の文は、「幽通賦」の乱辞の「（a）天草昧を造りて性命を立つ、（b）心に復りて道を弘むるは、惟れ賢聖、（c）渾元物を運び、流れて処らず（天造草昧、立性命兮。復心弘道、惟賢聖兮。渾元運物、流不処兮）」という文と深く関係する。（a）の「天造草昧、立性命兮」という文は（A）の「神先心以定命兮」と内容的にほぼ重なるが、乱辞では三命説の「受命」に当たるものとしての「命」を「性命」の語に置き換えていることから、「命」とともに「性」にも重点を置いていると思われる。というのも、（b）では「復心弘道、惟賢聖兮」として、天与の性命に立ち返って道を弘めることができるのは賢聖だけだとするから、ここでは心中の善性を道の実践の前提とすると考えられるからである。（b）は（B）で「命隨行以消息」として随命を述べたのと関連して、善性に従って道を弘めることで善き応報を受けられるのは賢聖だけだというのである。（c）の「渾元運物、流不処兮」との文は、（C）の「幹流遷其不濟兮、故遭罹而羸縮」と重なる内容で、「復心弘道」する賢聖であっても、自身の行為を原因としない禍福に遭って人生の成り行きが変転する可能性があるとするものである。そのうえで「幽通賦」の乱辞では（a）（b）（c）のあとに「身を保ち名を遺すは民の表。生を捨てて誼を取るも亦た道の用。憂傷して物に天せらるるは、忝（はじ）これより痛ましきは莫し（保身遺名、民之表兮。舍生取誼、亦道用兮。憂傷天物、忝莫痛兮）」という。これは、人生においては三命が複合的に作用するという運

命の見方から、天与の性命に従い、行いを正しくして、身を保ち名を遺すことは民の師表であるが、自己の行為に原因しない禍福に遭って生を捨てて義を貫く状況に至るのも道の働きによってであるから、心を傷めて早死にするのは恥であるとする班固自身の処世観を示すものである。

右のような「幽通賦」の運命観とそれにもとづく処世観は、班固が「離騷序」において、君子の道が窮まるのは運命であるとして、時勢を見極めた出処進退による自己保全を是とする「明哲保身」の処世観を示したこと、屈原が讒言を被って楚懷王に退けられたことで我が身を憂えて自死したことを否定的に述べることで、「離騷」に対する劉向・楊雄等の肯定的な「離騷」評価を取り上げることと矛盾しない。つまり、運命とは何かを三命説の三命の複合体として示し、「性命」と処世との在るべき関係を示す「幽通賦」の文章は、「離騷序」の運命観・処世観の原論に相当すると見ると同時に、班固が示した「道術」だと理解できる。それでは班固自身は、以上のような運命観・処世観に立ってどのような生き方を選択したのか。次節では、この点を「幽通賦」の班氏一族の処世に関する見方を手がかりにして考えていきたい。

### 三、「幽通賦」——班氏一族の処世の在り方と班固が選んだ生き方

「幽通賦」は「形気は根柢より発り、柯葉は彙して零茂す（形気発於根柢兮、柯葉彙而零茂）」と述べ、万物を形づくる気は根柢から起り、枝葉はそれに従って茂ったり萎んだりするという。この二句は、直後の「黎高辛に淳耀ありて、犇南汜に強大なり。羸威を百儀に取りて、姜三趾に本支あり（黎淳耀于高辛兮、犇強大於南汜。羸威成於百儀兮、姜本支虜乎三趾）」とある四句と密接につながっている。これら六句の文意を、後四句の典故と目される『國語』鄭語及び楚語下の記述により把握したい。『國語』鄭語には、周王の司徒であった鄭桓公が王室の多難を逃れる方途を摸索して成周の南方の情勢を問うたのに対して、大史の史伯が「荆子熊嚴子四人伯霜・仲雪・叔熊・季紉を生ず。叔熊難を濮に逃れて蚕となる。季紉是れ立つに、蕞氏將に之に起てんとするも、禍又克くせざるは、是れ天之が心を啓くなり。又甚だ聡明協和なるは、其の先王を蓋ふ。臣之を聞く、天の啓く所は、十世替はらず。夫れ其の子孫必ず光いに土を啓けば、偏るべからざるなり。且つ重・黎の後や、夫の黎や高辛氏の火正と為り、天明地徳を淳耀敦大にして、四海を光照するを以て、故に之を命けて祝融と曰ふ。其の功大なり。夫れ天地の大功を成す者

は、其の子孫未だ章らかならずんばならず。虞・夏・商・周は是れなり（荆子熊巖生子四人、伯霜・仲雪・叔熊・季紉。叔熊逃難於濮而蚤。季紉是立、蕩氏將起之、禍又不克、是天啓之心也。又甚聰明和協、蓋其先王。臣聞之、天之所啓、十世不替。夫其子孫必光啓土、不可偏也。且重・黎之後也、夫黎為高辛氏火正、以淳耀敦大、天明地德、光照四海、故命之曰祝融、其功大矣。夫成天地之大功者、其子孫未嘗不章。虞・夏・商・周是也）」と答えた箇所がある。ここにいう「重・黎」とは誰か。『国語』楚語下に見える、楚昭王に対して觀射父が述べた「少皞の世の衰ふるに及びて、九黎徳を乱し、民神糴糶して、物を方つべからず。顓頊之を受け、乃ち南正の重に命じ、天を司りて以て神に属めしめ、火正黎に命じて地を司りて以て民を属めしめ、旧常に復して、相侵瀆すること無からしむ。是れを地天の通ずるを絶つと謂ふ（及少皞之衰也、九黎乱徳、民神糴糶、不可方物。：顓頊受之、乃命南正重司天以属神、命火正黎司地以属民、使復旧常、無相侵瀆、是謂絶地天通）」との記載によると、少皞の世が衰え、民と神とが混雜して區別できなくなっていた時代に、顓頊は南正重に命じて天に神を所屬させ、火正黎に命じて地に民を所屬させることで、天地の交通を断絶させた功績を挙げたという。鄭語のいう「重・黎」とは、楚語下のいう顓頊時代の南正重・火正黎を指すと見られるのである。史伯は、顓頊時代の南正重・火正黎、およびその子孫である帝嚳時代の火正黎の血筋を引く子孫の季紉は天地を治めた祖先の大功による天啓が及ぶ存在で、かつ季紉は先王以上に聡明協和であるから、荆は子々孫々盤石だとして、南方に避難するのは困難だとしたのである。史伯の答えの後文にはさらに「祝融も亦た能く天地の光明を昭顯して、以て嘉材を生柔する者なり。其の後の八姓は、周に於いては未だ侯伯有らず。：融の興る者は、其れ芟姓に在るか。：惟だ荆のみ実（こゝ）に昭徳有り。若し周衰ふれば、其れ必ず興らん。姜・嬴・荆・芟は、実（こゝ）に諸姫と代（こゝ）も相干さん。姜は伯夷の後なり。嬴は伯翳の後なり。伯夷能く神に礼して以て堯を佐くる者なり。伯翳は能く百物を議して以て舜を佐くる者なり。其の後皆祀を失はずして未だ興る者あらず。周衰ふれば其れ將に至らんとす（祝融亦能昭顯天地之光明、以生柔嘉材者也。其後八姓、於周末有侯伯。：融之興者其在芟姓乎。：惟荆実有昭徳。若周衰、其必興矣。姜・嬴・荆・芟、実与諸姫代相干也。姜、伯夷之後也。嬴、伯翳之後也。伯夷能礼於神以佐堯者也。伯翳能議百物以佐舜者也。其後皆不失祀而未有興者、周衰其將至矣）」とあり、天地を治めた功績があった祝融（帝嚳時代の火正黎）の後裔で、周の衰微に当たって興起するのは荆楚の八姓のうちの芟姓であると、併せて、姜氏は天地

人の三礼を治めて堯を補佐した伯夷の後裔で、嬴氏は草木鳥獸を適宜に処置して舜を補佐した伯翳の後裔であるから、これら祖先の功績により、周の衰微に際して自己の祖先の祭祀を継続する齊と秦もまた興起するはずだという。つまり「幽通賦」の「黎淳耀于高辛兮、芟強大於南汜。嬴取威於伯儀兮、姜本支乎三趾」との文は、『国語』鄭語及び楚語下にもとづき、戦国の楚（芟氏）・齊（姜氏）・秦（嬴氏）はそれぞれ祖先の天地人を治めた功績によって天啓を得て興起したことを述べたものと理解できるので、前文の「形氣発於根柢兮、柯葉彙而零茂」とは、植物を用いて、祖先の功績の有無に従ってその子孫が盛衰することを喩えたものであることが知られる。この比喩によって、班固は一族の運命は一体であるという見方を示すわけである。この見方は、祖先から子孫への血筋の継承と祖先における功徳の有無が原因となつて、子孫が禍福に遭遇するという二要素によつて成つてると理解できるから、三命の複合体として人生の成り行きを理解する先述の運命觀のうちの「受命」と「随命」の結合に相当することが分かる。それでは班固は、班氏一族は功績の有無という点ではどうであつたとするのか。

「幽通賦」の冒頭部分には「高頊の玄胄に系がり、中葉の炳靈を氏とす（系高頊之玄胄兮、氏中葉之炳靈）」とある。後句の「中葉の炳靈を氏とす」の意味は、『漢書』叙伝上に「班氏の先は、楚と姓を同じくす。令尹子文の後なり。子文初めて生まれ、曹中に棄てらるるに、虎之を乳ふ。楚人乳を穀と謂ひ、虎を於禱と謂ふ。故に穀於禱と名づけ、子文と字す。楚人虎を班と謂へば、其の子以て号と為す。秦の楚を滅ぼすに、晋代の間に遷り、因りて氏す（班氏之先、与楚同姓。令尹子文之後也。子文初生、棄於曹中、而虎乳之。楚人謂乳穀、謂虎於禱、故名穀於禱、字子文。楚人謂虎班、其子以為号。秦之滅楚、遷晋代之間、因氏焉）」とあるのが参考になる。令尹子文は、出生ののち雲夢沢に棄てられたのを、虎が乳を与えて養つたことから、穀於禱（字は子文）と名付けられて、その子は鬩班と名乗り、秦が楚を滅ぼした際に、一族は晋・代の地域に遷つて班氏と称したという。だから「中葉の炳靈を氏とす」とは、班氏一族の祖先が楚と同姓の令尹子文であることをいう。令尹子文については『国語』楚語下に「莊王之世、若敖氏を滅ぼせるも、唯だ子文の後在り。今に至るまで郎に処りて、楚の良臣為り。是れ民を恤ふるを先にして己の富を後にするにあらずや（莊王之世滅若敖氏、唯子文之後在。至於今郎、為楚良臣。是不先恤民而後己之富乎）」とあり、楚莊王の時代に、民を憐れむ政治を行ったために存続できた楚の一族だとされる。一方、前句の「高頊の玄胄に系がる」

とは、班氏の遠祖が顓頊（高陽氏）であることを用いる。「史記」楚世家には「楚の先祖は顓頊高陽自り出づ。…高陽 称を生じ、称 卷章を生じ、卷章 重黎を生ず。重黎 帝嚳高辛の為に火正に居りて、甚だ功有りて、能く天下を光融す。帝嚳命けて祝融と曰ふ（楚之先祖出自顓頊高陽。…高陽生称、称生卷章、卷章生重黎。重黎為帝嚳高辛居火正、甚有功、能光融天下。帝嚳命曰祝融）」とあって、顓頊の曾孫である重黎が、帝嚳（高辛氏）の時代に火正の職につき、その功徳は天下に輝いて祝融と名付けられたとある。楚世家のいう帝嚳時代の火正の「重黎」は、前引の『国語』鄭語にいう帝嚳時代の火正の「黎」に相当する。楚世家はまた、重黎の弟・呉回の子である陸終の六人の子の末子の季連について「芈姓にして、楚は其の後なり」と記す。班固は前引の『国語』鄭語・楚語下及び『史記』楚世家の記述によって、顓頊→南正重・火正黎→黎（帝嚳時代）→令尹子文という自己の祖先の系譜を描き、班氏一族が顓頊の子孫である楚の班氏・令尹子文の系統に連なるとするのである。

「幽通賦」はこれについて「颯風に颯りて蟬蛻し、朔野に雄たりて声を颯ぐ。皇十紀にして鴻漸し、上京に羽儀有り。巨天に浴りて夏を派し、考愍しみに遭ひて以て行くゆく謡ふ。終に己を保ちて則を貽し、上仁の廬とする所に居る。前烈の純淑なるを懿し、窮と達と其れ必ず救ふ（颯颯風而蟬蛻兮、雄朔野以颯声。皇十紀而鴻漸兮、有羽儀於上京。巨滔天而派夏兮、考遭愍以行謡。終保己而貽則兮、里上仁之所廬。懿前烈之純淑兮、窮与達其必济）」とある。班氏は北方に雄飛して名を揚げ、漢の十代目の成帝の時に曾祖父の班況は京師長安に出て仕官した。王莽が天下を乱して中華を滅ぼした際、父の班彪は悲しんで行く行く歌謡しながら、身を保って法則を遺し、仁者の在り方を示した。わが班氏一族の祖先は、困窮しても栄達しても世を救う生き方を示したという。この箇所では班彪が王莽末に歌謡し、身を保って遺した法則とは『漢書』叙伝上が載せる「王命論」を指すと思われる。

昔在 帝堯の禪に曰く、咨 爾 舜、天の曆数は爾の躬に在りと。舜も亦た以て禹に命ず。稷・契と息にして、咸唐虞を佐け、四海を光いに濟ひ、奕世 徳を載せ、湯武に至るまで天下を有つ。其の遭遇 時を異にし、禪代 同じからずと雖も、天に応じ民に順ふは、其の揆 一なり。劉氏の堯の祚を承くるは、氏族の世、春秋に著らかなり。唐 火徳に拠りて、漢之を紹ぎ、始めて沛沢より起こるに、則ち神母 夜号きて、以て赤帝の符を著す。是に由りて之を言へば、帝王の祚には必ず明聖顯懿の徳、豊功厚利積累の業有りて、然る後、精誠 神明に通じ、流沢 生民に加はる。故に能く

鬼神の福饗する所、天下の帰往する所と為る。未だ運世 本無く、功徳 紀されずして、屈起して此の位に在るを得る者を見ざるなり。世俗 高祖布衣より起こるを見て、其の故に達せず、暴乱に遭遇したれば、其の劍を奮ふを得と以為ふなり。…神器 命有りて、智力を以て求むべからざるを知らざるなり（昔在帝堯之禪曰、咨爾舜、天之曆数在爾躬。舜亦以命禹。息于稷契、咸佐唐虞、光濟四海、奕世載徳、至于湯武、而有天下。雖其遭遇異時、禪代不同、至于応天順民、其揆一也。劉氏承堯之祚、氏族之世、著乎春秋。唐拋火徳、而漢紹之、始起沛沢、則神母夜号、以章赤帝之符。由是言之、帝王之祚、必有明聖顯懿之徳、豊功厚利積累之業、然後精誠通於神明、流沢加於生民、故能為鬼神所福饗、天下所帰往。未見運世無本、功徳不紀、而得屈起在此位者也。世俗見高祖興於布衣、不達其故、以為適遭暴乱、得奮其劍。…不知神器有命、不可以智力求也）。

班彪は、堯舜の禪讓から湯武の放伐へという具合に、王朝交代の在り方は時代により異なるが、天の曆数が天命・人心に依りて受け継がれる点では同一だとしたうえで、劉氏が堯の火徳の曆運を嗣いでいることは、堯（火）→舜（土）→禹（金）→湯（水）→武（木）→漢（火）という五徳の運次と、堯から劉氏への氏族の系譜が『春秋』に記載があることによって明らかであり、劉邦が沛から屈起するに当たり赤帝が天子となる符瑞が現れたのは、堯の功徳が「経伝」に記載される偉大なものだったことが天を感応させたからだという（堯の功徳は『書』堯典に、堯の舜への禪讓に際しての「咨爾舜、天之曆数在爾躬」という言葉は『論語』堯曰篇に、それぞれ記されている）。だから、神器というべき古帝王の曆運を受け継ぐ者にしてはじめて受命しうるのであり、それはただに暴乱の時代に乘じて劍を奮い、智力を働かせたというにとどまるものではないとする。班彪は、古帝王の血統の子孫への継承と古帝王における功徳の存在によつて革命が起こるとするのであるから、この班彪の革命説は、一族の運命は一体だとする先述の班固の見方と思想構造が一致すると認められる。さて右の「王命論」でさらに注目すべきは、班彪が用いた五徳の運次が、劉向父子の五徳終始説（『漢書』郊祀志賛所収）のそれと一致すること、また堯から劉氏への氏族の系譜が『春秋』に記載があるという点もまた劉向の説によることと見られることである。すなわち、右の「王命論」にいう劉氏一族の系譜の記述は『春秋』経文ではなく、『左氏伝』にあり、その『左氏伝』の記載は、『漢書』高帝紀・賛にまとめられている。ここで班固は、冒頭に『春秋』という書名を挙げたうえで、『左氏伝』の記載を用いながら、まず晋太史蔡墨

の「陶唐氏既に衰へて、其の後に劉累有りて、龍を擾らすを学び、孔甲に事ふ。范氏は其の後なり（陶唐氏既衰、其後有劉累。学擾龍、事孔甲。范氏其後也）」という言を掲げ、ついで晋の范宣子の言葉によって、陶唐氏（舜以前）↓御龍氏（夏）↓豕韋氏（殷）↓唐杜氏（周）↓范氏という系譜を述べて、劉累は御龍氏に当たるとし、さらに晋の士師であった范氏の士会が秦に亡命したのち晋に帰還した際、秦に残った士会の血縁者がまた劉氏を称したという。その後、劉氏が秦↓魏↓大梁（豊）と移住して、ついには劉邦へと連なるとしたうえで「漢帝の本系は唐帝自り出づ」云々という高祖への頌辞を述べる劉向の言葉を載せる。班固は、『左氏伝』により陶唐氏・堯から劉氏に至る系譜を描く劉向の説により、「漢は堯運を承け、徳祚既に盛んにして、蛇を断じて符を著し、旗幟は赤を上とびて、火徳に協ふは、自然の応にして、天統を得（漢承堯運、徳祚已盛、断蛇著符、旗幟上赤、協于火徳、自然之応、得天統矣）」と述べ、漢の高帝劉邦は堯の後裔であり、堯の火徳の曆運を嗣ぐものだとした。それゆえ「王命論」と『漢書』高帝紀・賛を併せ考えると、班彪父子は劉向父子から革命説を受け継いだと考えられるのである。

『漢書』叙伝上によると、「王命論」は、王莽の滅亡後、光武帝が冀州の地で即位したばかりで、公孫述が蜀漢で皇帝を自称するなど、天下の帰趨が定まらない、群雄割拠の時代状況を背景として作られた。班固は「乃ち王命論を著して以て時難を救ふ」と述べ、「王命論」を救世の著作と見た。それは、「王命論」において班彪が述べた高帝の受命の要因を述べた革命説が、実質上、「劉秀兵を発して不道を捕らへ、四夷雲集して野に闘ふに、四七の際火主と為る（劉秀発兵捕不道、四夷雲集、龍鬪野、四七之際、火為主）」（『後漢書』光武帝紀）との「赤伏符」なる讖記を用いた、高帝の九世孫・光武帝劉秀の即位の正統性を補強する理論として機能したからだろう。つまり班彪の功績とは、自己の「道術」により漢の統治を輔佐したことだったがゆえに、班固は「懿前烈之純淑兮、窮与達其必濟」と述べ、顛頂以来、榮達しては天地人を治め、困窮しては天人関係の在り方を明らかにする著作を遺し、天下を救済してきた自己の家系を称賛したのである。すると、班固は、班氏一族のもつ盛運を受け継ぐことになる。それでは、班氏一族の右のような処世の在り方を承けて、班固はどのような生き方を選んだのか。

「幽通賦」に「天の紘覆するを觀るに、実に謙を棄けて相順ふ。先聖の大猷を護るに、亦徳に亾づきて信を助く。…（中略）…素文は信にして麟を底せば、漢、祚を異代に賓とす（観天網之紘覆兮、実秉謙而相順。謨先聖之大猷

兮、亦亾徳而助信。…素文信而底麟兮、漢賓祚于異代）」とある。「先聖の大猷」とは、顔師古注に「繇は道なり」とあるのを参考にすると、先聖の道術たる六藝の学術を指すと捉えられるから、前四句は、天が信実なる者を助けることとは六藝が示す真理であることをいう。そこで「素文信而底麟兮、漢賓祚于異代」という二句は、孔子が制作した『春秋』の「文」が信実であるために麟が到来した、つまり『春秋』が漢という太平の世を興起するのを助けたとする革命説であり、漢の受命を素王としての孔子の功績に帰するものである。すなわち、ここにいる「素文」とは、班彪「王命論」にいう、陶唐氏が劉氏に連なることを証する『春秋』の記載を指す。そして『春秋』の記載が信実であるがゆえに、天の助けを得て、漢が堯の曆運を受けて興起したと班固はするのである。ここでは、孔子を素王と見る以上、『孟子』滕文公下篇に「世衰へ道微へ、邪説暴行有た作る。臣弑其君者有之。天子之事なり（世衰道微、邪説暴行有作。臣弑其君者有之。天子之事なり）」とあり、『公羊伝』哀公十四年の「君子曷為為春秋。撥乱世、反諸正、莫近諸春秋。…制春秋之義、以俟後聖」（前引）とある、『春秋』が撥乱反正の儀法を示したとの見方を伴っている（『公羊伝』哀公十四年の、獲麟ののち孔子が『春秋』を制作したとする獲麟解釈と、孔子の『春秋』制作が麟を招来したとする班固の獲麟解釈とは『春秋』制作と獲麟の順序が逆であるがそう考えられる）。だから「漢賓祚于異代」という句は、漢が受命ののち、周の後裔を周承休公に、孔子の子孫を殷の後裔として殷紹嘉公に封建することで「二王の後」を存続させ、漢と合わせて三統を通じさせるとの改制を行ったことを指す。すると班固は「素文」の中核を、孔子が『春秋』を制作して漢のために定めた、撥乱反正の儀法としての三統説と理解していることになる。

さてこの「素文信而底麟兮、漢賓祚于異代」という文を受けて、「幽通賦」に「孔昊に登りて上下し、群龍の経する所に緯す（登孔昊而上下兮、緯群龍之所経）」とあるのに注目したい。孔昊とは、孔子と太昊伏羲を指す。この文は、劉歆の『三統曆譜』（『漢書』律曆志上所収）に「易と春秋とは天人の道なり」とあるのを受け継ぎ、伏羲の『易』と孔子の『春秋』を中核とする六藝にもとづく「天人の道」の解明を、縦糸に横糸を張って絹布を織り成すことに見立てつつ、己の使命として提示した箇所と考えられる。班固が「幽通賦」において示した、緯書の三命説にもとづく自身の運命観・処世観や、『左氏伝』『公羊伝』をもとにした革命説や『国語』『史記』を典故とする班氏一族の処



世の記述や、「離騷序」及び『漢書』司馬遷伝・賛に示した屈原の処世及び著作についての「経伝」を用いた論評がそれに当たると見られるわけである。この班固の六藝ないし「経伝」にもとづく著述という創作方法は、『春秋（左氏伝）』に劉氏一族が堯の末裔であることを証する記載があったとした劉向・班彪の創作方法を受け継いだものである。それゆえ班固が後漢という太平の世において自ら選び取った生き方とは、劉向父子及び父班彪の「道術」を受け継ぎ、孔子の『春秋』が漢の太平の世を興起させた働きを模範として、六藝にもとづく「天人の道」を解明する著作により漢朝の統治を輔佐することであったと捉えられるのである。班固はこの生き方により、「幽通賦」において「懿前烈之純淑兮、窮与達其必濟」と総括した、班氏一族の生き方に連なろうとしたのだろう。「幽通賦」に「草木の区々に別るるを候ふに、苟に能く実れば必ず栄ゆ。世に没して朽ちざること要むるは、乃ち先民の程とする所（侯草木之區別兮、苟能實其必榮。要没世而不朽兮、乃先民之所程）」とあるのは、顛頊から班彪までの一族の処世の在り方を嗣いで六藝にもとづく「天人の道」を解明する著作を遺すことは、救世の行為である以上、天に通じて死後においても不朽の名声を遺し得るという信念を指す。そして「幽通賦」の「幽通」という言葉は、『漢書』睢夏侯侯京翼李伝の賛に「神明を幽賛して、天人の道に通合する者は、易・春秋より著らかなるは莫し（幽賛神明、通合天人之道者、莫著乎易・春秋）」とあるように、「易」と「春秋」を手本として、著述により「天人の道」を深く解明せんとする班固の「志」を表現したものであった。

### おわりに

「幽通賦」は、光武帝の建武三十一年（五五）頃の作とされる。この時、班固は二十四歳であった。光武帝から明帝へと移り替わる時期に在って、若き日の班固の身近な著作の手本として、父班彪の「王命論」や「後伝」があった。班固は、自伝である『漢書』叙伝上において「王命論」のあとに「幽通賦」を載せることで、班彪の『後伝』にもとづく『漢書』の制作の目的が自己の「道術」による漢朝の統治の輔佐であることを示した。すなわち『漢書』叙伝下に「元を高祖に起こし、孝平・王莽の誅に至るまで、十有二世、二百三十年、其の行事を綜べて、五経を旁貫して、上下洽通し、春秋考紀・表・伝、凡て百篇（起元高祖、終于孝平王莽之誅、十有二世、二百三十年、綜其行事、旁貫五経、上下洽通、為春秋考紀・表・志・伝、凡百篇）」とあるように、『漢書』は、

前漢十二代二百三十年の歴史に、五経（六藝）のもつ規範性を貫通させ、漢の受命の正統化を図った著作だったのである。また「典引」「両都賦」も同様の目的で制作されたと考えられる。<sup>①</sup>

班固における「明哲保身」とは、時勢を見極めた出処進退による自己保全を指す。「幽通賦」に「保身遺名、民之表兮」とある以上、この処世観は、右のような彼自身の著作の目的へと直結していたと理解できる。それゆえ、班固の創作態度の根柢には、孔子の『春秋』を模範として仰ぎ、著作により漢朝の統治を輔佐せんとする意識が存在したと考えられるのである。

### 注

(1) 岡村繁「班固と張衡―その創作態度の異質性―」（『小尾博士退休記念中国文学論集』、第一学習社、一九七六、所収）

(2) 「離騷序」の引用は、黄靈庚点校『楚辞章句』（上海古籍出版社、二〇一七）による。

(3) 班固が用いる「経伝」の「経」は、『漢書』藝文志で第一の地位を与えられている六藝（六経）を指す。「伝」の意味については、王充『論衡』の説を参考にしている。「論衡」書解篇には「聖人作其経、賢者造其伝、述作者之意、採聖人之志、故経須伝也」とあり、「経」は聖人の制作に、「伝」は賢者の制作にかかり、賢者の「伝」は聖人である作者の意志を採って述べたもので、「経」の意は「伝」を待ってはじめて明らかになるとする。そこで「伝」は「経」の解釈の意味となる。班固が用いる「伝」は、『易』伝や『春秋』三伝、『国語』、『春秋繁露』、『礼記』、『詩』の毛伝、『韓詩外伝』、『論語』、そして緯書類などを含むと考えておく。『論語』が「伝」に含まれることは、同じく『論衡』正説篇に「論語者、弟子共紀孔子之言行、勅記之時甚多、数十百篇、以八寸為尺、紀之約省、懐持之便也。以其遺非経、伝文紀識恐忘、故但以八寸尺、不二尺四寸也。：宣帝至下太常博士、時尚称書難曉、名之曰伝」とあるのが参考になる。『論語』は、前漢宣帝期にはじめて「伝」と呼ばれたもので、「経」が二尺四寸の簡に記されるのに対して、「伝」である『論語』は一尺（八寸）の簡に記されていたという。

(4) (ア) 「子曰：西狩獲麟曰、吾道窮、吾道窮。三年、身随而卒。階此而觀、天命成敗、聖人知之、有所不能救、命矣夫」（『春秋繁露』随本消息）(イ) 「初九曰、潜龍勿用、何謂也。子曰、龍徳而隠者也。不易乎世、不成乎名、遯世无悶、不見是而无悶。樂則行之、憂則違之、確乎其不可拔、潜龍也」（『周易』乾卦文言伝）(ウ) 「子曰、閑睢、樂而不淫、哀而不傷」（『論語』八佾）(エ) 「子曰：君子哉蘧伯玉。邦有道則

仕。邦無道則可卷而懷之」（『論語』衛靈公）（オ）「子曰、甯武子、邦有道則知、邦無道則愚。其知可及也、其愚不可及也」（『論語』公冶長） なお、（イ）（オ）の典故は、矢田尚子「王逸『楚辭章句』以前の屈原評價」（『楚辭「離騷」を読む―悲劇の忠臣・屈原の人物像をめぐる―」、東北大学出版会、二〇一八の第2部第8章として所収（初出は二〇一四）の注（13）（16）に指摘がある。

（5） 底本では「貶清絜・狂狷・景行之士」と作っているが、前掲矢田論文に従い、「絜」字のうえに「清」字を補った。

（6） 底本では「多称崑崙・帝閭・宓妃・虚無之語」と作っているが、前掲矢田論文に従い、「冥婚」を「帝閭」に改めた。

（7） 前掲矢田論文。

（8） 『漢書』の引用は、『漢書』（中華書局出版、一九六二）による。

（9） ただし、「略論」では「其論術学、則崇黄老而薄五経、序貨殖則輕仁義而羞貧窮。道遊侠則賤守節而貴俗功。此其大敝傷道、所以遇極刑之咎也」として五経の価値観を黄老思想よりも軽んずるがゆえに極刑に遇ったとする点など、『漢書』司馬遷伝・賛での論述と異なる部分がある。

（10） 八木章好「『明哲保身』考―中国の文人精神の表象として」（『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』45、二〇一四）。ただし、八木氏は同論文の注6で、「烝民」篇の詩意は仲山甫が周王を輔佐したその功績を称えるものであること、また当該詩句は全八章に及ぶ「烝民」篇の第八章に見えるが、第一章の「保茲天子」、第三章の「王躬是保」という詩句における「保」字はいずれも「保祐」（保護する、助ける）の意であり、それゆえ全篇の文脈から判断して「以保其身」の原義は「仲山甫が王の身を助ける」の意である可能性が十分にあることを述べる。

（11） 興善宏「言と黙」（『岩波講座 東洋思想 第14巻 中国宗教思想2』、一九九〇、所収）が中庸篇の「国有道、其言足以興、国無道、其默足以容」という文について「いうところは、時勢を見定めた調和ある進退を指す」とするのを参考にした。

（12） 釜谷武志「自己を語る賦―班固『幽通賦』を中心に―」（『中国文学報』、二〇一七）に指摘がある。

（13） 森三樹三郎『上古より漢代に至る性命観の展開』（創文社、一九七二）第十三章240頁。

（14） 『文選』所収「幽通賦」の「三變同於一体兮、雖移易而不忒」という箇所に対する、李善が引く応劭注に「晋大夫欒書、書子瓘、瓘子盈。書賢而覆瓘、瓘惡而害盈」とあり、曹大家注に「天命祐善災惡、非有差也。然其道广大、雖父子百葉、猶若一体也」とあるのが参考になる。

（15） 前引の『漢書』司馬遷伝・賛では「左氏伝」を、左丘明が『春秋』に記される記事の淵源の事実を集めた著作であるとするから、班固は、「左氏伝」を孔子の意思が反映された著作と見て、実質上「経」と同様に扱い、「春秋」と称したのでらう。

（16） 『左氏伝』昭公二十九年、襄公二十四年、文公六年（十三年）。この点は、福井重雅『漢代儒教の史的研究』第三編第一章「班固の思想上」第一節に指摘がある。福井氏は、漢堯後説と漢火徳説は、ただ「左氏伝」のみを唯一の典拠として成立する所説であったとする。

（17） 『漢書』梅福伝によると、前漢武帝の時、周の後裔である姫嘉を周子南君に封じていたが、元帝期に周子南君は周承休侯に格上げされた。そして成帝期に、梅福の建議により、孔子の子孫が殷紹嘉侯に封じられた。

（18） 鄭鶴声『漢班孟堅先生固年譜』（商務印書館、一九八〇）による。

（19） 福井重雅「班彪『後伝』の研究」（『陸賈「新語」の研究』、汲古書院、二〇〇二の付節一として所収）は、「後伝」はあくまでも『史記』の続成を目標に撰述された紀伝であったが、班固は『史記』の中から漢代に関する記録のみを別個に抽出して分類し、それを『後伝』と合体補完させることによって、前漢一代にのみ限定した独自の歴史を創造したとする。

（20） 拙稿「劉歆の三統説・六藝観とその班固『漢書』への影響―「天人の道」の分析を通して」（『山口大学教育学部研究論叢』67、二〇一八）第三節（4）でも同様のことを述べた。

（21） 拙稿「班固『典引』―「兩都賦」の天人論的特色」（『山口大学教育学部研究論叢』68、二〇一九）参照。